長野市立博物館
NAGANO CITY MUSEUM

博物館だより

Nagano City Museum
第122号

地獄極楽図（典厩寺所蔵）

長野市立博物館では、７月 23 日（土）から８月 28 日（日）まで、夏季企画展「地獄　あの世のイメージ」を開催します。平安時代中期に天台宗の僧侶であった源信（恵心僧都）によって著された『往生要集』は、地獄や極楽の世界を鮮明に描き出し、極楽往生を遂げるためには何をすればよいかを記したバイブルとして多くの人々に多大な影響を与えました。以来、源信が示したあの世の姿をもとに地獄や極楽を描いた作品が次々と生み出されてきました。本稿では、今回の企画展の概要を紹介するとともに、地獄と関わりの深い「十王信仰」について焦点をあててみたいと思います。

「地獄 あの世のイメージ」展の構成

第１章　死者のゆくえ

人々は死後どこにむかうのか、古くから様々に説かれてきました。これについては図像として示され、「あの世」が創造されてきました。

死者を「あの世」としての極楽浄土へ導くために、遺族はその節目に法会などの祭儀を行います。

まず第一章では現在に残る絵画や葬儀に用いる道具から、「あの世」への導き、そしてその世界について復元します。

第２章　地獄図とそれを取り巻く世界

地獄の様子については、地獄図としてあらわされてきました。地獄図を用いた絵解きが行われ、その様子が現実味を帯び伝えられました。ただ、地獄の姿を伝えることは、現世において悪事などの曲事を行わせないという道徳的な側面も持ちました。

様々な地獄図を紹介しながら、その特徴に迫ります。

第３章　閻魔の嘆き「御血脈の御印」と極楽

落語「御血脈」は次のようなお話です。

昨今、信濃の善光寺において「御血脈の御印」なるものを発行し、それがために罪人が地獄に落ちてこない。この「御血脈の御印」を善光寺より盗み出せば、地獄も昔日の繁栄をもたらすであろう。そこで、閻魔は石川五右衛門を盗み出す役に当て、まんまと「御血脈の御印」を奪い取った。しかし五右衛門は有難いと額に押して頂いたので、五右衛門も極楽へ行ってしまったという。

江戸時代以来、善光寺の「御血脈の御印」によって極楽往生が遂げられると信仰されてきました。その背景には、善光寺大勧進・等順の活躍がありました。等順は「融通念仏血脈譜」を 180 万部頒布し、このことで庶民の善光寺への信仰が広がりました。等順と善光寺信仰について触れることで展示のまとめとします。

（原田 和彦）

戸隠宝光社地区の地蔵堂

今回の展示では、戸隠の宝光社地区にある地蔵堂の資料も数多く展示されています。地蔵堂は古くから地域の人々に信仰されてきたお堂です。天保３年（1832）に書かれた縁起では、天長９年（832）に空海（弘法大師）が戸隠山に登り、三十三窟のうちの東窟に籠って修行していた際に、突如大地震が起こり、一心不乱に光明真言を唱えて合掌していると、地底から光り輝く大きな岩石が湧き出てきたそうです。そこに延命地蔵の姿を見た空海が、有難いと三拝九拝して真言を唱えていると、次第に姿が薄れ、もとの岩石に入っていきました。その岩石に厄除地蔵尊と刻み、開眼供養したものが本尊であると伝えられています。

そして天文年間にその石仏の傍らに「源珠庵」という一坊を設けたのが地蔵堂の始まりといわれています。その後も何度もお堂の建て替えが行われ、天保３年に行われた工事では、戸隠山顕光寺の別当・衆徒だけでなく、宝光社・中社組の庄屋などが世話人として名を連ねています。慶応４年（1868）のいわゆる神仏分離令によって源珠庵は廃され、明治９年（1876）に地蔵堂として再建されました。

十王信仰

さて、この地蔵堂には十王も祀られています。十王とは、中国で仏教と道教が習合していく中で成立した、10 人の道服をまとった冥界の王で、死者が生前に犯した罪の軽重を

糺す裁判官とされています。死者は初七日から七七日（49 日目）までに七王、百カ日、一周忌、三回忌にそれぞれ三王の前を過ぎ、罪の裁断を受け、これによって来世の生まれるところが決まるといいます。冥界と地蔵との結びつきから経典にも度々登場し、中国では地蔵十王図が多く描かれているほか、日本でも地蔵信仰の高まりとともに平安時代末～鎌倉時代以降に盛んに十王像が造立され、江戸時代には集落の墓所の入口やお堂などにも祀られるようになりました。

元禄 10 年（1697）に松代藩領内の村々にあるお堂やお宮を調査した「松代藩堂宮改帳」によれば、全 2450 か所あったお堂・お宮のうち、地蔵堂は 163 か所、十王堂は 80 か所ほどあったと記録されています。

十王像の調査報告

宝光社の地蔵堂にはかつて 10 体の像が祀られていましたが、三回忌に裁きを下す「五道転輪王」が盗難にあったため、９体しか現存していません。堂内には十王像のほか、約 40 躯の仏像が安置されており、平成８年（1996）に長野県文化財保護審議会委員・田幸俊宣氏によって調査が行われています。平成 11 年（1999）に地蔵堂の建て替え工事が行われた際には、宝光社地蔵堂建設委員会によって、田幸氏の調査報告書をもとに『地蔵堂と佛像たち』という冊子が発行され、お堂の由来や仏像の像種・年代等について詳細な記述がされています。令和３年度には、地域住民から改めて依頼があったことをうけ、長野市立博物館と長野市教育委員会事務局文化財課の職員とで再調査を行いました。今回の調査では、前回調査されていなかった仏像も含めて、堂内の全仏像について形状や法量、品質構造、保存状態、年代等について悉皆調査を行い、写真撮影を実施しました。ここでは特に十王像について概要を紹介します。

（1）秦廣王（しんこうおう）

初七日に裁きを行う王で、本地仏は不動明王とされています。飢えと寒さに苦しみながら険しい死出の山を越えてたどり着いた死者は、ここで生前に行った殺生について、鉄杖で叩かれながら問いただされるといいます。秦廣王をはじめとする諸像の形状はいずれも展角幞頭を被り、道服を着けるなど、典型的な十王の姿を示しており、口髭や顎鬚は墨描きしています。像高は 57.5㎝で、寄木造となっています。像底には朱書きで「秦廣王＜第一＞」とあります。

（2）初江王（しょこうおう）

二七日（14日目）に裁きを行う王で、本地仏は釈迦如来とされています。三途の川のほとりに建てられた官庁から、死者の渡河を監視するといわれています。初江王の裁きの前には奪衣婆と懸衣翁という二人の鬼がいて、盗みを犯した者は指を折られるといいます。また、彼らは死者から奪った衣服を木の枝に掛け、そのしなり具合で犯した罪の重さを量るともいわれます。形状は展角幞頭を被り、道服を着け、怒相で開口しています。口髭、顎鬚を墨描きしており、像高は57.7㎝です。秦廣王と同じく寄木造となっています。像底には朱書きで「初江王＜第二＞」とあります。

（3）宋帝王（そうていおう）

三七日（21日目）に裁きを行う王で、文殊菩薩を本地仏とします。官庁の前には悪猫と大蛇がいて、死者は体を引き裂かれたり縛り上げられたりするといわれます。ここで死者は不貞を犯していないかただされます。形状は展角幞頭を被り、道服を着けています。像高は58.5㎝です。かつては両手に何かを持っていたようですが、現在は失われています。像底には朱書きで「宗帝王（ママ）＜第三＞」とあります。

（4）五官王（ごかんおう）

四七日（28 日目）に裁きを行う王で、普賢菩薩を本地仏としています。五官王のもとでは、まず秤量舎というところで秤によって生前に犯した身業（殺生・偸盗・邪淫）と口業（妄語・綺語・悪口・両舌）の七つの罪の軽重が計測されます。その結果は勘録舎というところで冥官が検分したうえでまとめられ、閻魔王のところに報告されるといいます。像の形状は展角幞頭を被り、道服を着けており、口髭や顎鬚を墨描きしています。右手には先述の罪を量るための天秤を持っていますが、一部に欠損が見られます。像高は 56.0 ㎝で寄木造となっています。像底には朱書きで「五官王＜第四＞」とあります。

（5）閻魔王（えんまおう）

五七日（35 日目）に裁きを行う王で、本地仏は地蔵菩薩とされています。閻魔王庁には浄玻璃鏡と呼ばれる死者の生前の行いが映し出される鏡が設置されており、尋問に嘘をつけばたちまち見破られ、舌を抜かれてしまうともいいます。ここで死者は生前に行った善悪の業に基づいて、天上･人間･修羅･畜生･餓鬼・地獄の六道もしくは極楽のどこに生まれ変われるかが決定されるといいます。閻魔王は十王のなかでも特に信仰を集めている存在ですが、『往生要集』においても地獄の凄惨さとともにその支配者として名前が挙げられています。　像の形状は展角幞頭を被り、道服を着け、顎鬚をたくわえ、怒相で開口しています。右手には笏を持ち、像高は 97.5 ㎝と地蔵堂の十王像のなかでは最も大きなものとなっています。他の像と同じく寄木造ですが、像底に朱書きはありませんでした。

（6）変成王（へんじょうおう）

六七日（42 日目）に裁きを行う王で、本地仏は弥勒菩薩とされています。既に五官王の秤と閻魔王の鏡によって生前の行いは明らかとなっているので、六道のなかでどのような場所に生まれるのかが決められるといいます。形状は展角幞頭を被り、道服を着け、口髭や顎鬚を墨描きしています。像高は 58.5 ㎝で、寄木造です。展角幞頭の右側の角が欠失しているほか、右手第２～５指の先も欠失しています。像底には朱書きで「変成王<□□（第六ヵ）>」とあります。

（7）泰山王（たいざんおう）

七七日（49 日目）に裁きを行う王で、本地仏は薬師如来とされています。泰山とは中国山東省の泰安県の北部にある霊山で、もともとは泰山に住み、人の生命や禍福を司るとされる道教の神だったものが、仏教と習合して十王の一つになったとされています。日本でも古くから延命・除魔・栄達の神として信仰されており、平安時代の公家の日記には陰陽師が執り行った泰山府君祭の記述がしばしば見られます。ここでは特に両舌の罪が裁断されるといいます。また、輪廻転生する際の様々な条件も決められます。

形状は展角幞頭を被り、道服を着け、怒相で開口しており、口髭や顎鬚を墨描きしていますが、顎鬚の先は欠失しているようです。右手に笏を持ち、像高は 58.8㎝で寄木造です。像底に朱書きで「太山王（ママ）<第七>」とあります。

（8）平等王（びょうどうおう）

百カ日に裁きを行う王で、本地仏は観音菩薩とされています。ここでは、布施をするものは教え導かれ、貪欲なものは罰せられるとされ、遺族による追善供養の重要性が説かれます。形状は展角幞頭を被り、道服を着け、口髭や顎鬚を墨描きしています。右手には宝珠を持っており、像高は 56.4㎝で寄木造です。展角幞頭は右側の角が欠失しています。像底には朱書きで「平等王＜第八＞とあり、胎内背面側に刻銘朱書きで「十」と合い印があります。

（9）都市王（としおう）

一周忌に裁きを行う王で、本地仏は勢至菩薩とされています。ここでも追善供養が強調されます。遺族が一周忌の法要を行えば、死者の罪が許され、よりよいところに生まれ変われるとされます。形状は展角幞頭を被り、道服を着け、口髭や顎鬚を墨描きしています。展角幞頭は左右の角が欠失しています。像高は 56.5㎝で寄木造です。像底には朱書きで「都市王＜第九＞」とあり、胎内背面側と差首の抜けた部分の背面側に刻銘朱書きで「五」と合い印があります。

いずれも彩色の剥落がありますが、旧態をよく保っており、往時の姿を偲ぶことができます。勧進札によると作者は江戸神田明神の仏師で、奉納したのは宝光院 17 坊の衆徒といわれており、形式から制作年代は 18 世紀頃と考えられます。十王信仰は、さらに３人の王とそれぞれに対応した本地仏が付け加えられ、七回忌、十三回忌、三十三回忌などの追善供養を行う「十三仏」として知られるようになっていきますが、現在でも 7 日ごとに法要を行うのは、こうした十王信仰の名残といえるでしょう。

地蔵堂には、このほかにも特筆すべきものとして役行者と学問行者の対になった像も安置されています。いずれも大型で、像高は役行者は 111.5㎝、学問行者は 78.0㎝あります。学問行者の胎内背面には安永４年(1775)の銘がある札が付けられており、その頃に両像が制作されたと思われます。近代に入ってから赤漆に塗りなおされていますが、細部は写実的な像容を示しています。役行者は修験道の祖とされる伝説的人物ですが、それと並んで戸隠山を開いたとされる学問行者の像が配置されており、戸隠信仰が強調された、地域性に富んだ像であるといえるでしょう。

十王と地蔵信仰

冥界に向かった死者はこのように十王の裁きを受け、生前に罪を犯した者は地獄へ落されてしまうのですが、それを救ってくれるのが地蔵菩薩とされています。平安時代末期に成立した『今昔物語集』には地蔵菩薩の霊験譚が数多く残されており、末法思想の広がりとともに地蔵菩薩へ救済を求めた人々の信仰を読み取ることができます。次第に地蔵菩薩は道祖神とも習合しながら多くの人々に親しまれ、民間信仰としても現代まで受け継がれていくことになりました。

人々は、地獄図によって描き出された罪を犯した者が向かう世界の凄惨さにおびえると同時に、自らの死後の安寧を願い、現世での善行を積むよう努めたのかもしれません。

（野村駿介）

参考文献

宝光社地蔵堂建設委員会「地蔵堂と佛像たち」(1999)
越師徳門「宝光社地蔵堂と幽魂社」(『長野』長野郷土史研究会、1993)
小林計一郎「松代藩堂宮改帳」(『長野』長野郷土史研究会、1988)
常盤真重「上水内の十王堂」(『長野』長野郷土史研究会、1980)
霜田巌「『松代藩堂宮改帳』について」(『長野』長野郷土史研究会、1964)

博物館だより　第122号　**発行日2022年6月30日**

長野市立博物館
〒381-2212 長野市小島田町1414
TEL:026(284)9011
http://www.city.nagano.nagano.jp/museum

鬼無里ふるさと資料館
〒381-4301 長野市鬼無里1659
TEL:026(256)3270

戸隠地質化石博物館
〒381-4104 長野市戸隠栃原3400
TEL:026(252)2228

信州新町美術館・有島生馬記念館・信州新町化石博物館
〒381-2404 長野市信州新町上条88-3
TEL:026(262)3500